

# 小学校外国語科における温かな人間関係が児童の 学習意欲に与える効果

－協同学習とファシリテーション技術に基づく自己決定理論  
の心理欲求の充足を目指した授業実践－

浦下 楓\*・大場 浩正\*\*  
(令和6年9月30日受付；令和6年10月24日受理)

## 要 旨

本稿の目的は、小学校外国語科において、協同学習とファシリテーション技術に基づく、自己決定理論の3つの心理欲求の充足を目指した授業実践を通して、「関係性の充足」が児童の学習意欲にどのような影響を及ぼすか検証し、さらに、児童の振り返りの記述を質的に分析することによって3つの心理的欲求の充足に有効な手立てや指導を探ることである。実践前後の質問紙調査の結果、「関係性・協同」の平均値は有意に上昇し、「学習意欲」についても有意に上昇した。最後のパフォーマンス課題終了後、振り返りシートの自由記述である「自分の発表はどうだったか」と「Unit 6の学習前と後を振り返って、自分の中で何がどう変わったか」についての記述を質的に分析した結果、「有能性の充足」と「会話スキル指導の有効性」における記述が多く、ファシリテーション技術の有効性や英語使用に関する自己効力感の向上が重要であることが明らかになった。

## KEY WORDS

Foreign languages 外国語 Cooperative learning 協同学習 Facilitation technique ファシリテーション技術  
Self-determination theory 自己決定理論

## 1 はじめに

現行の学習指導要領では、激しく変化する社会を生き抜いていくために、児童が生涯にわたって能動的に学び続ける「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を行うことが求められている（文部科学省，2018）。櫻井（2019）は、「主体的・対話的で深い学び」について、「自ら学ぶ意欲を育成することによって達成できるもの」（p.18）と述べている。また、櫻井（2019）は、自ら学ぶ意欲を喚起する要素として、Ryan and Deci（2000）が提唱する自己決定理論（Self-Determination Theory）を挙げている。自己決定理論とは、「人間の動機付けについての基本的な理論で、人間が学ぶことや働くことなどの多くの活動において「自己決定的（自律的）であること」が、高いパフォーマンスや精神的な健康、幸福感をもたらすとする理論」（櫻井，2019，p.19）である。その中でも基本的心理欲求理論は、人間の基本的な心理欲求である「自律性の欲求」「有能性の欲求」及び「関係性の欲求」の充足を重要視する考え方であり、3つの心理欲求が満たされた時、学習者は内発的に動機づけられ学習課題に対して自ら取り組むようになる。

廣森・田中（2006）は、大学生に対して自己決定理論に基づいた動機づけを高める英語授業実践を行い、「自己決定理論における3つの心理的欲求を満たした授業実践は、英語学習者の内発的動機づけを高めることができる」（p.116）と結論づけている。しかしながら、課題として、(1) 学習者の個人差と彼らに必要とされる教育的な働きかけの関係について探求していく必要があること、(2) 限られた人数の大学生を調査対象としたこと、(3) 英語学習者の動機づけを高める要因として3欲求を取り上げたが、これら以外の動機づけの要因についても検討していく必要があることを挙げている。

さらに、「対話的な学び」の実現について、櫻井（2019）は「協同学習が典型的な学習の一つになる」（p.65）と述べている。協同学習とは、「学習者が共に課題に取り組むことによって、自分の学びと相手の学びを最大限に高めようとする、小グループを活用した指導法」（Johnson, Johnson, & Holubec, 2002）である。大場（2015）は、英語コミュニケーション活動に協同学習を取り入れることは「学習者の英語への意欲や自己効力感が高まる」（p.184）と述べている。また、中央教育審議会（2021）は、『「令和型の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可

能性を引き出す。個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)』を取りまとめ、その中で、Society5.0時代における教師に求められる資質・能力の一つとして、ファシリテーション能力が挙げられている。岩瀬・ちよん(2011)は、ファシリテーションについて「権利と権利の対立が起こる教室に、良好なコミュニケーションでチームワークを育みながら、共にゴールをめざすことがとても上手な学級経営の技術」(p.20)であるとし、「1人ひとりの自己選択、自己決定を大切にすると人権尊重スキルでもある」(p.20)と述べている。植木(2023)は「自己決定理論における3つの心理欲求(自律性の欲求、有能性の欲求、関係性の欲求)と協同学習及びファシリテーション技術に基づいた指導とは密接な関係があると考えられる」(p.140)と述べている。

これら3つの心理欲求の中で、「関係性の欲求」に着目すると、「関係性の欲求がまず充足され、つぎに有能さへの欲求が充足され、そして最後に自律性の欲求が充足される、という充足の順序も重要であると思う」と櫻井(2017, p.88)は述べている。他にも「関係性の欲求」に焦点をあてた理論として対人関係動機づけ理論(Relationships Motivation Theory)も新しい。Deci and Ryan(2014)は、「他者との質の高い関係は、関係性の欲求を充足するにとどまらず、自律性の欲求も充足し、さらには有能性の欲求もわずかながら充足する」としている。さらに、廣森・田中(2007)は、大学生を対象に行った授業実践において、「動機づけが低い学習者の内発的動機づけを高めるためには、まず他者との友好的な連帯感を十分に育てた後、個人の学習に対する責任や選択を徐々に与えようという段階的なアプローチを採用すると良いだろう」(p.74)と教育への示唆を述べている。小学生を対象にした授業実践において、植木(2023)は「自己決定理論の3つの心理欲求を満たすように授業づくりを行い、それを協同学習とファシリテーション技術に基づいて指導することは、(中略)「協同因子」において上位群・下位群を問わず有効に作用する」(p.144)と結論づけていることから、関係性は3欲求の中で最も多くの児童が充足感を得やすいことや、協同学習とファシリテーション技術における指導が児童の関係性を充足させることが示唆されている。この点に関して、Kim(2001)は、「組織(グループ)が成功するためのコア理論」を提案している。この理論によると、「結果の質(Quality of Results)」を高めるためには、まず、「関係の質(Quality of Relationships)」を高めることが大切である。関係の質が高まると「思考の質(Quality of Thinking)」および「行動の質(Quality of Actions)」が高まる。最終的には大きな成果が得られ、さらに信頼が深まり関係の質が向上していく。

また、ちよん(2016)は、ファシリテーションの基本的な考え方として「日常のコミュニケーションが良好で心の体力が温かいと私たちは何事にも意欲的に取り組み、周囲からも承認され、さらに自分らしく進むことができる」(p.17)と述べている。心の体力を温めて、本来自分が持つ力を発揮して生きることを「エンパワメント」と言い、教室の中で児童たちがお互いの心の体力を温め合うことで力を合わせ、思った以上の力を発揮することができる(岩瀬・ちよん, 2011)。本実践では、児童たち自身がファシリテーション技術を磨き、「承認」と「共感」の温かな姿勢で聴き合うことによって「温かな人間関係」を構築し、安心・安全でエンパワメントなクラスにつながり、学習意欲も向上すると考える。

このような背景により、本実践研究では、協同学習とファシリテーション技術に基づき、自己決定理論の3つの心理欲求のうち、特に関係性の充足を目指した英語(外国語)授業実践が児童の外国語学習意欲にどのような影響を及ぼすのかを検証していくこととした。

## 2 研究の目的

本実践研究の目的は、以下の2つである。

- (1) 小学校外国語科において、協同学習とファシリテーション技術に基づく、自己決定理論の3つの心理欲求の充足を目指した授業実践を行い、特に関係性の充足が児童の学習意欲にどのような影響を及ぼすかを明らかにする。
- (2) 3つの心理的欲求の充足に有効な手立てや指導の在り方について、児童の振り返り記述から、質的に明らかにする。

## 3 実践の内容と調査方法

- (1) 実践期間 2023年8月下旬～12月上旬
- (2) 実践対象者 新潟県内の公立A小学校 5年生18名
- (3) 実践単元 Blue Sky elementary 5の Unit 4 She can sing well. (全10時間), Unit 5 This is my sister. (全10

時間) 及びUnit 6 I want to go to France. (全10時間) である。

(4) 児童の実態

実践対象の学級には、事前の担任への聞き取りより、英語でのコミュニケーションに積極的な児童が多く、週1回のALTとの授業を楽しみにしている児童が多いことが分かった。また、実践が始まってから様々な教科の授業を参観する中で、一斉授業では積極的に発言する児童と控えめな児童に二極化されている雰囲気を感じたが、ペアやグループの活動になると仲間の話を傾聴し、自分の意見も伝えることができる児童が多い様子も見られた。

(5) 授業実践

Unit 4, Unit 5及びUnit 6を通して育成を目指した児童のファシリテーション技術に関して、大場(2020)は、「児童・生徒・学生がファシリテーターの技術を身に付けることによって、主体的・対話的で深い学びを目指すことができる」と述べている。本実践では、児童一人一人がファシリテーションの技術を身に付け、お互いにエンパワーし合える関係性の構築を目指し、Unit 4から長期的な視点で児童のファシリテーション技術の育成を試みた。「エンパワーの法則」(ちよん, 2016, p.23)を意識し、Unit 4ではまず、ファシリテーションとは何か知ってもらうことを目標に、第2著者によるホワイトボード・ミーティング®講座やオープン・クエスチョンとあいづちを用いた日本語でのペアコミュニケーション及びホワイトボード・ミーティング®「私の構成要素」(図1参照)を用いた意見出しを体験した。次に、Unit 5では、新たにホワイトボード・ミーティング®「聞いて書く」を取り入れ、児童一人一人の想いや願いを承認しながら学級としての単元目標の設定を行った。他にも、児童は、英語版のオープン・クエスチョンとあいづち(大場, 2020)を取り入れたSmall Talkにチャレンジした。そして、Unit 6ではUnit 5に引き続きホワイトボード・ミーティング®「聞いて書く」を用いた単元目標の設定を行った。また、英語版オープン・クエスチョンとあいづちに方略的能力を育成するためのコミュニケーション方略を取り入れ、パフォーマンステストでのやり取りと関連付けながら単元を通して継続的にSmall Talkを行った。これらの活動を主として、児童自身がファシリテーターになりお互いに支援し合える関係性づくりを目指した。なお、実践授業は第1著者が担当し、学級担任や第2著者がサポートに入った。

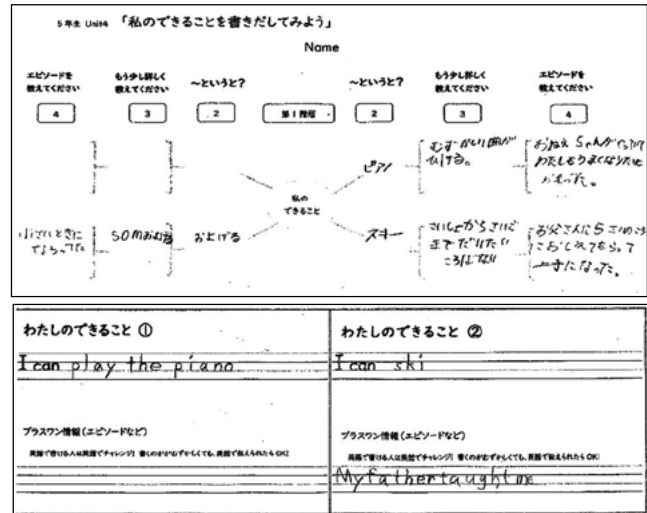


図1 私の構成要素と「できること」の記述

(6) 単元計画

表1, 表2及び表3はファシリテーション技術の1つであるプログラムデザインを意識し、バックワードデザインで作成した単元指導計画である。パフォーマンス課題は、Unit 4とUnit 6で留学生を、Unit 5ではB小学校(交流連携校)の5年生児童を相手に設定し(小小連携)、全て対面で交流を行った。児童一人一人が単元の見通しを持ち、(自律的な学習者を目指して)これからの学びを自分事化できるように、Unit 5とUnit 6の1時間目にはホワイトボード・ミーティング®「聞いて書く」の手法を用い、パフォーマンス課題を通して相手にどんな気持ちになってほしいのか及びそのために伝えられるようになりたい英語表現について、ペアでファシリテーターとサイドワーカーに分かれて、オープン・クエスチョンとあいづちを用いながら、想いや願いを承認し合い、ホワイトボードに可視化する活動を行った(図2参照)。児童一人一人の可視化されたホワイトボードをもとに設定した各単元の目標は、以下の通りである。

- ・Unit 4: 留学生とA小学校(授業実践校)の5年生がお互いのことを知り、留学生が「A小学校5年生はこんなことができるの?」と新しい発見をし、「楽しかった!またA小学校に来たいな!」と思ってもらえるように、自分のできること自慢大会をしよう。
- ・Unit 5: B小学校(交流連携校)の5年生がA小学校5年生の仲間の魅力を知り、「中学校生活で、一緒に過ごすのが待ち遠しいな!」と思ってもらえるように、仲間のできることや得意なことを紹介しよう。
- ・Unit 6: 日頃お世話になっている先生方と留学生及びA小学校5年生がお互いに「楽しい!また行きたい!」と思えるように、自分の行きたい国とその魅力を紹介し、Thank you旅行に誘おう。

いずれの単元も児童自身の自己選択、自己決定がしやすい環境設定を意識し、学習目標を共有した後で個人の単元目標を設定する時間を設けた。また、この活動を通して、相手意識や目的意識の醸成を促すことで、児童の学習意欲



を喚起できるように試みた。毎時間の授業においても、児童が学びたい英語表現と授業内容をリンクさせることで、学ぶ意欲を維持できるよう意識した。

表1 Unit 4の単元計画

時	学習活動 ◎全体の目標・メイン活動	指導法	心理欲求
1	◎Unit 4の学習計画をたてよう ・Unit 4の学習目標と学びたい英語表現の設定・留学生と自己紹介をし合う。	協 ファ	自 関
2	◎「できる」「できない」の表現を聞き取ろう① ・留学生のできることとできないことを聞き取り、ペアで相談して1枚のWBに記入する。	協 ファ	有 関
3	◎話し合いのプロになろう(ホワイトボード・ミーティング®出前講座) ・ファシリテーションとは何か知り、実際にファシリテーターとサイドワーカーを体験する。		
4	◎「できる」「できない」の表現を聞き取ろう② ・日本語でのペアコミュニケーション「週末のお休み、どんな感じてしたか？」 ・A小学校の先生方のできることとできないことを4人チームで聞き取る。	協 ファ	有 関
5	◎「～できますか」とたずねる表現を聞き取ろう ・留学生と授業者が「～できますか」と尋ね合っている動画を視聴し、ペアで相談して1枚のWBに記入する。	協 ファ	有 関
6	◎自分のできることを伝えよう ・できるだけ多くの仲間に自分のできることを伝え、かくれ双子を見つける。	ファ	自 関
7	◎相手のできることについてたずねよう ・4人チームでできるだけ多くの仲間にできることをインタビューし、たくさんのBINGOを目指す。	協 ファ	有 関
8	◎留学生に伝えたい自分のできることを考えよう ・ホワイトボード・ミーティング®「私の構成要素」を用いて自分のできることを発散し、英語で伝える練習をする。	ファ	自
9	◎留学生に伝える発表を目指して、リハーサルをしよう ・ルーブリックを確認し、実際のパフォーマンステストを想定してリハーサルを行う。	ファ	自 関
10	◎留学生とA小学校の5年生がお互いのことを知り、「A小学校5年生はこんなことができるの?」と新しい発見をし、「楽しかった!またA小学校に來たいな!」と思ってもらえるように、自分のできること自慢大会をしよう	協 ファ	有 関

協：協同学習， ファ：ファシリテーション， 自：自律性， 有：有能性， 関：関係性

表2 Unit 5の単元計画

時	学習活動 ◎全体の目標・メイン活動	指導法	心理欲求
1	◎Unit 4の学びを振り返り、Unit 5の学習計画をたてよう ・日本語でのペアコミュニケーション「Unit 4のパフォーマンステストどんな感じてしたか？」 ・Unit 5の学習目標と学びたい英語表現の設定(ホワイトボード・ミーティング®「聞いて書く」)	ファ	自 関
2	◎得意なことを表す表現を聞き取ろう① ・ALTの得意なことについてペアで聞き取り、1枚のWBに記入する。 ・B小学校5年生と自己紹介をし合う(動画)。	協 ファ	有 関
3	◎得意なことを表す表現を聞き取ろう② ・スポーツ選手の意外な得意なことを聞き取り、be good atの表現に慣れ親しむ。	ファ	有
4	◎B小学校の仲間とのオンライン交流に向けて練習をしよう ・3人チームになり、仲間のできることを伝え合う。	協 ファ	関
5	◎B小学校の5年生と仲間のできることを紹介し合おう(オンライン交流) ・3人チームで仲間のできることを紹介し、B小学校の仲間のできること紹介を聞く。	協 ファ	有 関
6	◎仲間の得意なことと性格を伝えよう ・日本語でのペアコミュニケーション「昨日のオンライン交流、どんな感じてしたか？」 ・3人チームで役割分担をし、仲間の得意なことを聞き合い(質問する、答える、書く)、英語で伝える練習をする。	協 ファ	自 関
7	◎B小学校との対面交流に向けて、リハーサルをしよう ・実際の交流を想定して、役割分担(紹介者、紹介される人、ほめほめ係)をし、リハーサルを行う。	協 ファ	有 関
8	◎B小学校5年生がA小学校5年生の仲間の魅力を知り、「中学校生活で、一緒に過ごすのが待ち遠しいな!」と思ってもらえるように、仲間のできることや得意なことを紹介しよう	協 ファ	有 関
9	◎B小学校5年生との交流を振り返ろう ・B小学校5年生の仲間に向けて、メッセージを送る。 ・交流で伝えた表現を英語表記の正しさに注意しながら書き写す。	協 ファ	有 関
10	◎Unit 5の学びを振り返ろう ・Unit 5の学びを振り返り、振り返りシートに記入する。 ・ALTの家族の紹介を聞き取る。	ファ	自 有

協：協同学習， ファ：ファシリテーション， 自：自律性， 有：有能性， 関：関係性

表3 Unit 6の単元計画

時	学習活動 ◎全体の目標・メイン活動	指導法	心理欲求
1	◎Unit 5の学びを振り返り、Unit 6の学習計画をたてよう ・B小学校5年生児童からのメッセージを見て、Unit 5の交流について振り返る。 ・Unit 6の学習目標と学びたい英語表現の設定	協 ファ	自 関
2	◎行きたい国とその理由を聞き取ろう ・ある国についての3つのヒントを聞き、ペアで相談して1枚のWBに予想を記入する。	協 ファ	有 関
3	◎行きたい国を伝えよう ・5年生行きたい国No.1を知るために、できるだけたくさんの友達にインタビューをし、結果をペアで確認する。	協	関
4	◎行きたい国とその理由を伝えよう ・チームのみんなで日本に生還することを目指し、世界一周すごろくUNOをする。	協 ファ	有 関
5	◎行きたい国とその国でしたいことについて発表メモを書こう ・発表の見通しをもつ。 ・発表に向け、アイデアを発散する。	ファ	自
6	◎ゲストが行きたくなるように、紹介内容をアップデートしよう ・ゲストが海外旅行でしたいことについて話す動画を個人&チームで聞き取り、確認する。	協 ファ	自 有 関
7	◎ゲストに伝わる紹介を目指して練習をしよう ・紹介メモにゲストの希望を取り入れ、ルーブリックを見ながら発表練習をする。	協	関
8	◎パフォーマンス課題に向けて、リハーサルをしよう ・役割分担(発表者、ほめほめ係、撮影係)を決め、ゲスト役に向けて発表する。	協	関
9	◎日頃お世話になっている先生方と留学生及びA小学校5年生がお互いに「楽しい!また行ってみたい!」と思えるように、自分の行きたい国とその魅力を紹介し、Thank you旅行に誘おう	協 ファ	有 関
10	◎Unit 6の学びをふりかえろう ・留学生からのフィードバックを見て、Unit 6の取り組みを振り返る。	ファ	自 有

協：協同学習， ファ：ファシリテーション， 自：自律性， 有：有能性， 関：関係性

(7) 活動例

以下は、自己決定理論の3つの心理欲求の充足を目指し、協同学習とファシリテーション技術に基づき、Unit 6において実践した活動である。充足を目指した心理欲求は( )の中に示した。

①自己調整学習を促す毎時間の授業構成と振り返りシートの工夫(自律性)

毎時間の活動として、授業冒頭において本時の学級としての学習目標を提示した後、個人で目標を設定する時間を設け、振り返りシートに記入した。授業終盤には

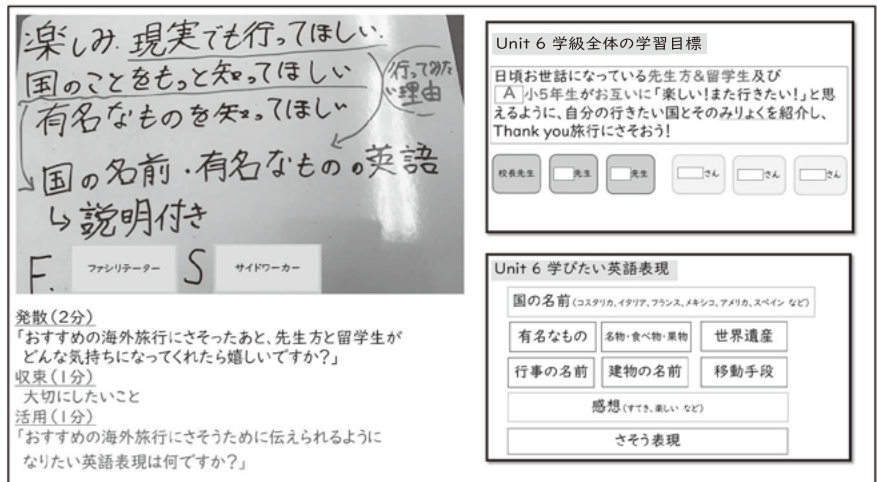


図2 聞いて書く

振り返りシートを用い、本時の取り組み度(10段階評価)及びその点数の理由、次の授業でできるようになりたいことや頑張りたいことについて自由記述で書いてもらった。このサイクルは自己調整学習方略を意識している。自己調整学習方略とは、(1)予見の段階(目標の設定と学習のプランニング)、(2)遂行の段階(効率的な学習の遂行)及び(3)内省の段階(振り返りと意欲の維持)である(櫻井, 2019, p.33)。また、櫻井(2019)が、「自己調整学習ができるということは、自律的に学習を進められるということ、自ら学ぶ意欲を引き出し育てることにつながる」(p.148)と述べていることから、自己調整学習を取り入れることは「自律性」の充実につながる事が期待できる。

②オープン・クエスチョンとあいづち及び方略的能力としてのコミュニケーション方略を取り入れた継続的なSmall Talk(自律性、有能性及び関係性)

第2時から7時にかけて、パフォーマンス課題でのやり取りと結び付けながらSmall Talkを行った。泉(2017)によれば、方略的能力としてのコミュニケーション方略とは、「コミュニケーションを維持し、故障が起こればそれを修復するとともに、故障を避け、コミュニケーションを円滑に進めるために知識や技能(聞き返しや確認、つなぎ言葉やジェスチャーなど)」(p.23)である。このコミュニケーション方略の育成は、外国語によるコミュニケーション

ンへの自信に効果的に作用し、コミュニケーションへの積極的な態度につながる事が示唆されている(泉, 2017, p.25)。このことは、「有能性」の充足につながるとされる。本実践では、会話名人になるためのスキルとして、図3の7つのスキルを紹介し、段階的に取り入れながら練習を重ねた(図4参照)。このように、オープン・クエスチョンとあいづちも取り入れながら好意的な関心の態度で聞くことで、「関係性」の充足も意識した。

他にも、自身の伝えたい内容を自己決定して伝えるという点で、「自律性」の充実もねらった。

### ③チームで協力してタスク完成を目指す活動(有能性と関係性)

第4時には、「世界一周旅行すごろくUNO」を行った。協同学習の基本的構成要素である「互恵的な関係」「個人の責任」「参加の平等性」及び教材の与え方による「相互協力関係」を促すためにコマとなる飛行機は1チーム一機にして実施した。また、始める前に協同の価値のインストラクションとして「チームみんなで協力して全員で日本に生還すること」を確認し、協同の価値や意義を児童が意識できるように心がけた。自己決定理論では、何度も発話練習をすることによる自身の英語力の肯定的な認知が「有能性」の充足につながり、チーム全員で助け合い日本に生還するために協力する点で「関係性」

の充足を意識した。加えて、学ぶ意欲の源として、櫻井(2019, p.43)は「知的好奇心」を挙げている。この活動を構想する際も、児童が「面白そう! やってみたい!」と思えるように、日頃の児童との関わりからUNOが好きな児童が多い実態を考慮したり、コマとなる飛行機や国旗カード及び地図はまるで本当に海外旅行をしていると感じられるようにこだわって作成した。

### ④フィードバック(自律性と有能性)

Reeve(2009)は「有能性」の欲求の充足・促進にあたり、社会的文脈の要因として構造(structure)を重視している(鹿毛, 2013, p.184)。例として、進歩するための励まし、コツ、ヒントを提供することや、適時的で行動に随伴した予測を可能にするような一貫性のあるフィードバックを実施することを挙げている。本実践では、これからの授業について見通しをもつことができるような児童の振り返り記述を授業冒頭で全体に共有したり、児童一人一人の振り返りシートの記述に毎時間温かな言葉でフィードバックを送ったりすることを心がけた。また、フィードバックを基に自己の学習を振り返り、方向性を確認したり、新たな目標を自己決定したりすることは「自律性」の充足にもつながるのではないかと考える。

パフォーマンス課題終了後には留学生からフィードバックを受け、児童と共有した。留学生からの「Unit 4よりも英語が上手くなっていて驚いた。」「たくさん準備してきたことが伝わってきた。」「みんなが協力的で支え合う雰囲気が素晴らしかった。」「楽しかった!」「これからも英語学習頑張るね!」などのフィードバックは、これまでの頑張りや取り組みを承認し、児童の「有能性」を充足させるとともに、さらなる学習意欲につながるのではないかと推察する。

## 4 データの収集と分析方法

表4は、協同学習とファシリテーション技術を取り入れた本実践が、児童の関係性の充足と学習意欲に効果的であるかを検証するために用いた質問紙調査の質問項目である。全19項目から成り、5件法(5:大変そう思う, 4:そう

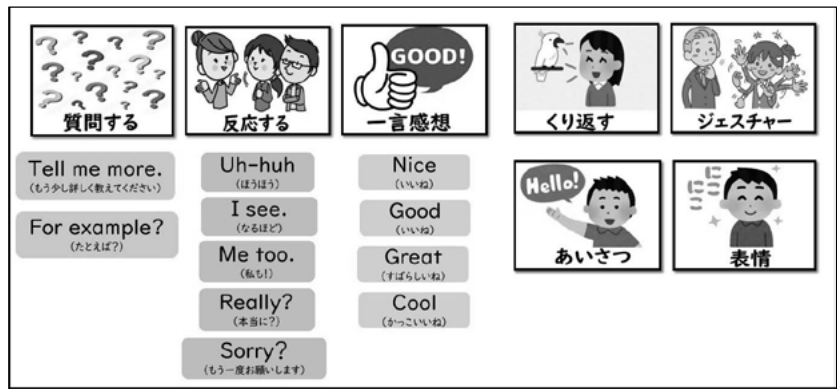


図3 会話名人になるための7つのスキル



図4 7つのスキルを使用した会話例



思う、3：どちらでもない、2：そう思わない、1：全くそう思わない）で調査を行った。質問項目は、高井・大場（2022）に基づく「主体的」「目的意識」「相手意識」、長濱ほか（2009）に基づく「協同効用」「個人思考」「互恵懸念」及び横山（2019）に基づく「L2WTC (Willingness to communicate in the second language)」の7つのサブ因子に基づき作成した。調査は、実践前後に行い、児童の意識の変化を分析した。本実践では、児童同士の関係性に着目していることや協同学習も取り入れていることから、「協同効用」「個人思考」及び「互恵懸念」を「関係性・協同」とまとめることとした。また、「意欲」について、鹿毛（2013）は、「やりたい」という強い希求の行為の原動力として、意図的、計画的に目的の実現までやり抜こうとする心理状況を指している（p.3）と述べている。また、鹿毛（2013）は「エンゲージメントという用語こそが「意欲的」という意味をよく表しているのではないか」（p.7）と述べ、エンゲージメントについては「課題に没頭して取り組んでいる心理状況、すなわち、興味や楽しさを感じながら気持ちを集中させ、注意を課題に向けて持続的な努力をするような「熱中」する心理状態」（Reeve, 2002）としている。これらのことにより、本実践では、「主体的」「目的意識」「相手意識」及び「L2WTC」の4因子をまとめて「学習意欲」因子とする。さらに、Unit 6のパフォーマンス課題終了後、振り返りシートの自由記述である「自分の発表はどうだったか」と「Unit 6の学習前と後を振り返って、自分の中で何がどう変わったか」についての記述を質的データとして分析した。

表4 質問紙調査のカテゴリー、サブカテゴリー及び質問項目

因子	サブ因子	No.	質問項目
関係性・協同	協同効用	1	グループのために自分ができることをするのは楽しい。
		2	みんなでいろいろな意見を出し合うことは、自分のためやみんなのためになる。
		3	1人でやるよりも、友達と協力した方がうまくいく。
	個人思考	4	*みんなで一緒に作業をすると、自分の思うようにいかない。
		5	*グループ活動をすると、必ず手をぬく（やらない）人がある。
		6	*課題に取り組むときは、1人でやる方が、やりがいがある。
		7	*勉強が得意な人は、グループ学習をする必要がない。
		8	*グループ学習は勉強が苦手な人のためにある。
学習意欲	主体性	9	外国語の授業で、相手の考えや気持ちを聞きたいと思う。
		10	外国語の授業以外でも、英語でもっとたくさんやり取りができるようになりたいと思う。
	目的意識	11	外国語の授業で、願いをもって活動に取り組むことができている。
		12	外国語の授業で、毎回のめあてを意識して授業に取り組んでいる。
	相手意識	13	外国語の授業で、伝える相手を意識しながら、活動に取り組んでいる。
		14	外国語の授業で、ペアに自分の思いが伝わるように英語を工夫して話そうとしている。
		15	外国語の授業で、英語で自分のことを伝えたり、相手のことを知りたいという気持ちをもち続けている。
	L2 WTC	16	外国語の授業で、やり取りをする時、進んでペアの人の話を聞こうとしている。
		17	外国語の授業で、やり取りをする時、進んでペアと話そうとした。
		18	外国語の授業で、やり取りをする時、ペアに英語で話しかけやすい。
		19	外国語の授業以外でも、英語でもっとコミュニケーションしたいと思う。

\*反転項目

## 5 結果と考察

表5は、実践の前後における質問紙調査の平均値と標準偏差（括弧内）を示している。「関係性・協同」と「学習意欲」の実践前後の変化を検証するために2要因分散分析を行った結果、「実践前後」の主効果（ $F(1, 17) = 9.56, p < .01$ ）と、「因子」の主効果（ $F(1, 17) = 5.50, p < .05$ ）が有意となった。交互作用は有意ではなかった（ $F(1, 17) = 0.03$ ）。従って、実践の前後で、「関係性・協同」と「学習意欲」の両方とも高まったことが分かった。

「関係性・協同」に関しては、Unit 4の早い時期に、児童がファシリテーションの技法の一つであるホワイトボード・ミーティング®を学んだことが効果を発揮していると思われる。ホワイトボード・ミーティング®は、ホワイトボードを活用して進める会議の方法であり、授業における話し合いにおいても効果的である（ちよん, 2016）。進行役をファシリテーター、参加者をサイドワーカーと呼び、「ホワイトボード・ミーティング®質問の技カード」で深い情報共有を進めていく。そして、話し合いに、「発散・収束・活用」のプロセスを作り、色を分けて書いていく。児童は、どの單元においても「ホワイトボード・ミーティング®質問の技カード」のオープン・クエスチョンとあいづちを用いてペアコミュニケーションを行い、ペアの相手の話を好意的な関心の態度で聞くことによって、安心・安全な場づくりを目指していた。また、ペアやグループでの学習においても、単にペアやグループにするだけでなく、役割分担を行い、各人の責任を明確にした。

また、各Unitのパフォーマンス活動による留学生やB小学校の児童との交流においても、ペアやグループで協力して活動しなければ達成できないような課題を設定することによって、児童がわくわくドキドキしながらチャレンジし

表5 実践前後の平均値と標準偏差（N=18）

因子	実践前	実践後
関係性・協同	3.92 (0.27)	4.21 (0.38)
学習意欲	4.27 (0.72)	4.53 (0.37)

ていったと思われる。さらに、Small Talkの活動において、英語版のオープン・クエスチョンとあいづち（大場，2020）の一部を用いた即興的なインタラクション（やり取り）によって、単に英語のスピーキング力を高めるだけでなく、お互いのことを知ることによって関係性が深まっていったことも考えられる。「世界一周旅行すごろくUNO」においても、互恵的な協力関係など協同学習の基本的な構成要素に基づいた活動が設定されており、協同を促す要素が活動自体に仕込まれていた。これらのことにより、協同的に学ぶことの意義を見出し、温かな人間関係が構築され、関係性の欲求を充足していったのではないだろうか。

「学習意欲」に関しては、実践前において既に高い数値を示していたが（ $M=4.27$ ），実践後には有意に高くなった。自律性を目指した活動は主体性を促し、各ユニットの最後にパフォーマンス活動を設定することによって、相手意識と目的意識が高まり、さらに英語をもっと使用してやり取りをすること（L2WTC）に積極的になっていったことが考えられるだろう。

表6は、Unit 6のパフォーマンス課題終了後、振り返りシートの自由記述である「自分の発表はどうだったか」と「Unit 6の学習前と後を振り返って、自分の中で何がどう変わったか」についての記述を質的に分析したものである。結果として、7つのカテゴリーが生成された。「自律性の充足」と「関係性の充足」よりも「有能性の充足」に関する記述が多かった。

櫻井（2017）が述べているように、協同学習とファシリテーション技術を取り入れた学習により、学び合いがうまくいき関係性の欲求が充足されことによって、自分にもできるという有能感が高まっていったと考えられるだろう（「発表への自信」や「自己の英語に対する肯定的な認知」などのサブカテゴリーの内容を参照）。また、留学生との交流により海外や異文化への興味がさらに湧き、L2WTCにも効果的であったと思われる。さらに、オープン・クエスチョンとあいづちを使用することにより、会話が弾むことを実感し、ファシリテーション技術としての会話スキルの指導が学習意欲を高めたのではないだろうか。

本実践においては、「関係性・協同」も「学習意欲」も高まったが、その因果関係については分からない。しかしながら、両者とも上昇したことは、何らかの関係があるのではないかとと思われる。

表6 Unit 6 パフォーマンス課題終了後、振り返りシートの自由記述の質的分析

カテゴリー	サブカテゴリー	児童の振り返り記述（原文ママ）
自律性の充足	学級全体で決めた単元目標への達成感	ゲストも自分も楽しく、行ってみたいと思うことができました。その国の持ちょうともか言えて、行ってみたいと思える発表ができてよかった。
	個人で決めた単元目標への達成感	自分の最終ゴール（はっきりと英語をしゃべってまた行ってみたいと思っほしい）をたっせいできた。 最後の目標（留学生によく伝わるように、アイコンタクトで話そう）を達成できた。
	自己調整学習の繰り返しによる自己成長の認知	自分の目標に向かってどのように練習すればよいかなど、自分で考え、取り組むこともできました。毎度振り返ることで、次からどうすればよくなるかなど分かり、どんどん成長することができました。
有能性の充足	発表への自信	もっと自信をもって発表できました。とても楽しく、笑顔になり、元気が出てきてよかったです。
		自信をもち、すらすらとと言えることができました。
		自信をもって大きな声でしゃべれたし、英語をすらすらはなせたのでよかったです。
	繰り返し練習することで得られた肯定的な認知	自信をもって楽しみながらできたのでよかったです。
		最初は全然話せなかった英語も毎回練習して上手にはなせるようになりました。
		最初は練習しているときに難しく分らなかつたけど、調べて練習していくと分かるようになっていきました。
		最初は英語での話し方が分らなかつたけど、じょじょに頑張つてできるようになった。
自己の英語に対する肯定的な認知	最初は英語の言い方やすらすら言えなかつたけど、練習するたびにだんだん慣れてきて自信をもてるようになりました。	
	発表会で英語でうまくはなせた。コスタリカのみりよくを英語で話せた。 Unit 5と比べると英語がすごく上手になってきた気がします。 英語を少ししゃべれるようになった。 すごくうまく言えたり、すごく楽しかったです。	
コンピテンスの充足による英語学習への自信	Unit 6の学習を通して、たくさんのお国を知ることができました。そして、もっと英語が楽しいと感じられるようになりました。自分の中ですごく自信を持つことができました。	
関係性の充足	具体的なフィードバックによる単元目標達成認知の促進	ゲストから「行ってみたい！」の一言をもらえました。行ってみたいと思えるように、その国のみりよくを紹介できるようになった。
	協同学習への肯定的な認知	グループで協力してゲストとアイコンタクトで話すことができてよかったです。
会話スキル指導の有効性	自分以外の他者の学習活動への取り組み状況などへの気づき	自分だけでなく、ほかの人の発表を聞くことで、その国のこともすることができました。
	会話スキルの使用	ジェスチャーをしたり工夫して話せたんじゃないかと思いました。 しつもんやナイスグッドなどの表現を相手に伝えられるようになった。
	会話スキル使用による会話の弾みの実感	会話の中に盛り上げを取り入れ、たくさん質問を自分からできるようになりました。オープン・クエスチョン、あいづち、反応、感想などを会話の中に入れるととても盛り上がりました。
ことばへの気づき	会話スキル使用による自己成長の認知	言葉が伝わらなくてもジェスチャーや自分の使える英語を話してできました。とても成長を感じられてよかったです。
	外国語の新しい単語や表現についての言及	Unit 5の時よりもさらに英語をいっぱい発音と意味を知れました。
留学生とのコミュニケーション	運用・コミュニケーションへの気づき	Unit 6でもUnit 5で使った英語のWe canがつかえてなんか役に立ったななどと思いました！
	留学生とのコミュニケーションを楽しむ姿	〇〇さん（留学生）と話していたらだんだん楽しくなってきました。
意欲	留学生とのコミュニケーション不安	〇〇さん（留学生）は言葉難しいのですごく緊張しました。たまに言葉が分からないことがあったので、不安な気持ちになりました。
	外国語授業以外での英語使用の意欲	生活でも使ってみたいです。
	海外への興味や英語使用の意欲	これまで学んだことをいかし、本当に海外旅行に行きたいです。
	学び続ける意欲	英語をたくさん言えるようになったし、どんどん学びが広がっていきました。これを、将来に活かしていきたいです。



## 6 結論

本実践の成果として、協同学習とファシリテーション技術に基づく授業は温かな人間関係づくりにつながる可能性が示唆された。また、3つの心理的欲求の充足をめざした活動を積み重ねることで、自己調整学習や自分の英語力への肯定的な認知にもつながり、児童の学習意欲が高まる可能性が示唆された。

今回の授業実践は、自己決定理論のうち、「関係性・協同」因子のみに関する質問紙調査であったが、今後、「自律性」や「有能性」に関する質問紙調査も行うことで、今回の質的分析との関連性を確認していくことができると考える。また、今回特に重視した「関係性の充足」が「自律性の充足」や「有能性の充足」にどのような効果を及ぼしているのかを調査することで、協同学習やファシリテーションに基づく温かな人間関係づくりが学習の基盤となることを確認することができる。さらに、最初に、「自律性の欲求」「有能性の欲求」及び「関係性の欲求」の3欲求を満たすと、学習者は内発的に動機づけられると述べたが、有機的統合理論などを用いてさらなる調査を行うことで、今回の実践で児童の内発的な学習動機が高まったのかについて、明らかにすることができるだろう。

## 参考文献

- 泉恵美子 (2017). 「小学校英語における児童の方略的能力育成を目指した指導」『京都教育大学教育実践研究紀要』第17号, 23-33.
- 岩瀬直樹・ちょんせいこ (2011). 『信頼ベースのクラスをつくる よくわかる学級ファシリテーション①かかわりスキル編』解放出版社.
- 植木清華 (2023). 「小学校外国語科における協同学習とファシリテーション技術に基づく指導の有効性－自己決定理論による授業づくりが学習意欲に与える影響－」『教育実践研究』第33集, 139-144.
- 大場浩正 (2015). 「協同学習に基づく英語コミュニケーション活動が英語学習意欲や態度に及ぼす影響：テキストマイニングによる分析」『上越教育大学研究紀要』第34巻, 177-186.
- 大場浩正 (2020). 「英語学習におけるファシリテーション技術の活用－ホワイトボード・ミーティング®の有効性に関する予備実践の報告－」尾島司郎・藤原康弘 (編) 『第二言語習得論と英語教育の新展開』(pp. 39-52), 金星堂.
- 鹿毛雅治 (2013). 『学習意欲の理論－動機づけの教育心理学－』金子書房.
- 櫻井茂男 (2017). 『自律的な学習意欲の心理学』誠信書房.
- 櫻井茂男 (2019). 『自ら学ぶ子ども』図書文化社.
- 篠村恭子 (2024). 「小学校外国語授業における児童の振り返り自由記述の分析観点の枠組みの作成の試み」『島根大学教育学部紀要 (教育科学)』第57巻, 11-22.
- 高井季代子・大場浩正 (2022). 「小学校外国語科におけるタスクベースの授業づくり－協同学習とファシリテーションに基づき、自信をもって発表するために－」『上越教育大学研究紀要』第42巻, 145-154.
- ちょんせいこ (2016). 『ホワイトボード・ミーティング®検定試験公式テキストBasic 3級』株式会社ひとまち.
- 中央教育審議会 (2021). 『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～ (答申)』[https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt\\_syoto02-000012321\\_2-4.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt_syoto02-000012321_2-4.pdf)
- 長濱文与・安永 悟・関田一彦・甲原定房 (2009). 「協同作業認識尺度の開発」『教育心理学研究』第57巻1号, 24-37.
- 廣森友人・田中博晃 (2006). 「英語学習における動機づけを高める授業実践：自己決定理論の視点から」『外国語教育メディア学会機関誌』43巻, 111-126.
- 廣森友人・田中博晃 (2007). 「英語学習者の内発的動機づけを高める教育実践の介入とその効果の検証」『JLTA Journal』Vol. 29, No. 1, 59-80.
- 文部科学省 (2018). 『小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説』開隆堂出版.
- 横山吉樹 (2019). 「コミュニケーションへの意欲がコミュニケーション活動の言語パフォーマンスに与える影響について」『北海道大学紀要 教育科学編』70(1), 175-184.
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (2014). Autonomy and need satisfaction in close relationships: Relationships motivation theory. In N. Weinstein (Ed.), *Human motivation and interpersonal relationships: Theory, research, and applications* (pp. 53-73). Springer.
- Johnson, D. W, Johnson, R. T., & Holubec, E. J. (2002). *Circles of learning: Cooperation in the classroom*. Interaction Book Company. [石田裕久・梅原巳代子訳 (2010). 『学習の輪 学び合いの協同教育入門』二瓶社].
- Kim, D. K. (2001). *Organizing for learning: Strategies for knowledge creation and enduring change*. Pegasus Communications, Inc.
- Reeve, J. (2009). *Understanding motivation and emotion* (5<sup>th</sup> Ed.). John Wiley & Sons.
- Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2000). Self-Determination theory and the facilitation of intrinsic motivation, social development, and well-being. *American Psychologist*, 55, 68-78.

# The Effects of Warm Human Relationships on the Students' Learning Motivation in Elementary School Foreign Language Classes: Classroom Practice Aimed at Fulfilling the Psychological Needs of the Self- Determination Theory Based on Cooperative Learning and Facilitation Techniques

Kaede URASHITA\* · Hiromasa OHBA\*\*

## ABSTRACT

The purpose of this article is to (1) examine the effect of "satisfaction with a relationship" on the students' motivation to learn and (2) explore the effective methods and instruction to satisfy the three psychological needs by qualitatively analyzing the students' reflective statements, through the practice of making the aim of the classes satisfy the three psychological needs of the self-determination theory based on cooperative learning and facilitation techniques in elementary school foreign language classes. As a part of the research, a questionnaire was administered. The results of the questionnaire survey before and after the practice showed a significant increase in the "relationship and cooperation" category and a significant increase in "motivation to learn" category. Regarding the qualitative analysis of the free-response statements: "How was my presentation?" and "What changed in me before and after Unit 6," it was clear that the effectiveness of the facilitation skills and the improvement of self-efficacy in using English were important.